

## 「鼻」論：「羅生門」を媒介として

下野, 孝文  
九州大学文学部研究生

<https://doi.org/10.15017/10412>

---

出版情報：文献探究. 21, pp.1-10, 1988-03-25. 文献探究の会  
バージョン：published  
権利関係：



# 「鼻」論

## 「羅生門」を媒介として

下野孝文

「漱石を第一の読者」<sup>(1)</sup>として刊行された第四次「新思潮」には、芥川もかなり意気込んで参加した模様である。そして、「鼻」(「新思潮」大5・2)は、果してその第一の読者である夏目漱石によって周知のように高い評価が与えられた。

後にこの「鼻」執筆時の回想を記した「あの頃の自分の事(別稿)」(『中央公論』大8・1)が発表される。それによると、「羅生門」(『帝國文学』大4・11)、「鼻」は失恋の所産であり、その痛手から逃れるために「なる可く現状と懸け離れた、なる可く愉快な小説が書きたかつた」と、その動機を述べている。確かにその頃の苦悩は、書簡に沈痛な言葉をもって綴られている<sup>(2)</sup>。しかし、だからといって二作品を同列に扱い、しかも失恋のみの所産とするのは早計すぎよう。なぜなら「羅生門」「鼻」の作品世界の相違は芥川の創作意識の相違であり、二作品の執筆以前にも芥川の本質の変革を示す書簡を見いだせるからである。それらの書簡から考えても、すでに大正三年初頃には芥川の芸術に対する目覚めは始まっている。海老井英次氏の指摘する大正三年秋における芸術観上の「精神的革命」<sup>(3)</sup>を考慮に入れて芥川の芸術への意識の経緯を要約すれば、「芸術に対する意識の目覚め」(大正三年初頃)、「大きな芸術に対する精神的革命」(大正三年秋)、「失恋を契機とする芸術に対する一層の覚醒」(大正四年初頃)、「羅生門」(大4・11)、「鼻」(大5・2)という状況になる。

失恋事件をこの二作品にどこまで連関させて考えるかは論者によって見解の異なるところであろう。「羅生門」は、三好行雄氏の「失恋の体験はへ柔かな引き金であった」という見方が妥当な指摘

と考えられ、また「鼻」は当時の書簡やメモに窺える芥川の心理を考慮すればその関わりは極めて希薄なものと考えられる。

そのような経過を経て描かれた「なる可く現状と懸け離れた、なる可く愉快な小説」となるはずの「羅生門」「鼻」であったが、結果は「一向愉快とも思はれぬ」いものになってしまった。問題はこの「愉快」となるべきはずの小説が「愉快」なものにならなかったといった時の「愉快」という言葉を、芥川がどういうニュアンスをもって使ったかということである。はたしてこの言葉を文字通りの楽しいとか心地良いとかいう質の意味に解せるだろうか。

そこで、本稿では「羅生門」の中での「愉快」の意味を媒介として「鼻」の中での「愉快」の状況を考え、「鼻」の原拠とされる作品との比較からその独自性を検討し、更に、「鼻」に潜む芥川の意識を作品の経緯にそって考えてみる。

## 二、

「羅生門」は道德、倫理という社会の枠組が取り払われ、髪を抜かれた死人、老婆、下人の行為の連鎖が「悪」という形容をもって表現される、そしてその各々の行為がすべて生きるためという前提において許容される世界が描かれたものである。下人の「悪」を働くことへの道德的な躊躇は、老婆の生きるために感傷的な感情など断ち、悪を許すことで自己の悪を是認しようとする論理によって払拭される。下人は死人の悪を許すことで自身の悪を肯定する老婆か

ら、やはり生きるために着物をはぎとる。下人は老婆の論理をそのまま受容し、老婆の悪を許すことで自身の悪を肯定しようとするのである。

芥川は、行動の止め金となっていた道徳や倫理を蹂躪し、ただ生きるために「黒洞々たる夜」の中へ強盗を働きに急ぐ下人の姿を描くことで常に様々な思惑や感情に束縛されている人間を親念の上で超越し、解き放とうとしたのだ。関口安義氏もこの点について、「それは失恋事件を通して実感したわづらわしい人間関係や人間倫理の否定、つまり己を縛る律法からの完全な解放にこそあったのである」と、「現状と懸け離れた、なる可く愉快な小説」という一節の意味を「羅生門」との関連で説いている。<sup>(40)</sup>

それでは、その様々な要因に就縛されている（人間）の解放というモチーフは、一体どこから生じてきたのだろうか。これは、周知の芥川の複雑な家庭環境にその源を見ることができよう。それは、この時期の彼の手記の中に周囲の束縛に対する反抗やその束縛を解こうとしながら結局なしかつた心情を吐露したものを見いだせるからだ。それは、具体的には吉田弥生との結婚を家族に反対され断念した経緯を述べた書簡であり、また、「鼻」執筆時のものを含めたメモである。

周知の複雑な愛情の中でどうすれば芥川と家族との関わりが円滑に営まれるかとなれば、各々の注ぐ愛情に芥川が応える事であり、彼らの感情に自らをまかすことである。そう考えてみると、失恋事件に限らず芥川が自身の感情を抑制しなければならなかった事象がしばしばあったのではないかと推測される。その点からも「羅生門」執筆の動機は失恋事件にも顕在してきた周囲の彼への束縛や自己犠牲的に振る舞ってしまう自身の性情であったと考えられる。それゆえに、生きるために道義的束縛や感傷的な感情を捨象することができたという意味で、「羅生門」における下人の造型は、芥川にとつて「愉快」な像に成り得たであろう。つまり、芥川の「羅生門」に求めた「愉快」さの内実は、たんに楽しいとか面白いとかいいう質のものではなくて、人間を様々な形で束縛しているものから解き放つ

こと、日常性の中にある煩わしい枷を超越する状況であったと考えられる。

しかし、「鼻」の「内供」は下人と違い自己の論理に従うどころか、常に周囲の挙動に精神の安定を揺らされ対他的（へ生）を営む人間である。高德の僧としてその權威に安住することもできずに周囲の挙動に敏感に反応し、それにあわせて自己を対応させてゆくという自己の核を持ちえない人間である。「羅生門」が少なくとも「愉快」な作品だったとするならば、「鼻」はとも芥川の志向に応じた作品とは考えられない。結局、「鼻」こそ芥川が「一向愉快と思はれない」と述べた作品だったのである。

### 三、

「鼻」はこれまでも多くの論及がなされ、典拠とされたものも「今昔物語」を始めとしてユーユリーの『The Nose』・シングの『The Well of Saints』などが指摘<sup>(41)</sup>されている。そこで、各典拠と「鼻」との類似、相違点を検討して「鼻」の独自性を明らかにし、「愉快」という表現と「鼻」との関わりを考えてみる。

まず、『The Nose』と「鼻」との関わりを検討する。この作品に潜むものは、奇抜な設定と構成をもって描かれる主人公コワリヨーフの愚行に託された官僚貴族への痛罵であろう。彼らは官等だとか地位だとかというものに固執し、その品位とか威厳とかを保つことを第一義としている。ゴリゴリは、そのような支配階級にある者達の愚かしさを鼻の得失に憂喜するコワリヨーフの姿を通して軽妙な筆致でありながら、鋭い視点をもって支配階級にある者達の内貌を暴いている。この作品でその眼目となっているのは、コワリヨーフが八等官であるのに対し、彼の額を離れた鼻は五等官の装いで町を歩いていったという点であろう。鼻が彼の精神の象徴であるとするならば、すでにコワリヨーフは五等官の気位でいたということ

になる。この状況を鼻を失って狂奔するコワリョーフの姿と重ねて考へるならば、いかにその等官という「権威」が彼の生にとつて重要であつたかが理解される。また、その等官の高低にのみ自己の価値を見いだそうとする態度に彼の内部の偏狭さを窺うことができよう。

次にこの「The Nose」においてコワリョーフの顔を離れ服を着てあちらこちら出歩く鼻と「内供」の長大な鼻との意味の相違を考へてみる。「The Nose」において、鼻が八等官コワリョーフより官位の高い五等官の装いで馬車に乗り町を駆ける<sup>Point 4</sup>点、鼻のないコワリョーフがいづも通りに威厳を持って振る舞えない<sup>Point 4</sup>点を考へれば、彼の鼻を「権威」、そこから生じる「自尊心」の象徴として捉えてもよいだろう。一方、「内供」は、彼が「内道場供奉の職」という「権威」を所持していたことで鼻が奇型であるという苦惱から逃れられていたわけではない。「内供」は、「沙弥の昔から内道場供奉の職に陞つた今日まで、内心では始終この鼻を苦に病んで来た」わけであり、「日常の談話の中に、鼻と云ふ語が出て来るのを何よりも俱れ」「自分が憎である為に、幾分でもこの鼻に煩される事が少くなつたとは思つてゐない」のである。「内供」の奇型の鼻に対する苦慮は彼の内部深く及んでおり、それはコワリョーフの鼻のような「権威」の象徴というよりも、もっと「内供」の自己意識に近いものの象徴として読みとるべきである。

コワリョーフが鼻をなくして何を失つていたかというのを支えていた「権威」、更には身の程以上の「自尊心」である。近代管理社会の中で、「権威」というものに自己の存在意義を見だし、彼自身の内面の本質を喪失していたのだ。一方「内供」も確固たる意志や姿勢を持って生きられなかつた状況は類似しているが、しかし、彼が鼻の奇型をもって失つていたものが高徳の僧であるという、所謂「権威」そのものでなく不安定な自己意識であつたという相違は、「鼻」の主題を考へる上で重要である。この虚弱な自己意識は、後に芥川の当時の内部との関わりで考へてゆく。

#### 四、

また、これも芥川の旧蔵本の中にあるシングスの「The Well of Saints」の検討が中村友氏<sup>9)</sup>によってなされた。大正三年初頃の書籍や翻訳などから考へると、芥川はシングやイエーン<sup>10)</sup>を始めとするアイルランド文学への興味を多分に持っていたようだ。氏によると、両者の場面設定（「内供」の鼻の変化が「異常→正常→異常」という展開になっているのと同様、「The Well of Saints」もその変化において「異常→正常→異常」という三段階の場面の展開がなされているという状況）の「異→正→異」の型態上の三段階の変化とその段階における心情の変化が類似しているといふのである。

確かに、第一段階から第二段階に展開する場面において、マアチン夫婦が光を得る前後の周囲の態度に「傍観者のエゴイズム」に近いものを見いだすことはできよう。また、第二段階で正常にもどつた後、かえつて以前より辛い心持ちを味わう点や、第三段階で元の異常な状態に安堵する点などその類似性を指摘することもできる。しかし、二作品の相違点も少なくない。

第一段階における異常な状態が「内供」にとつて切実な問題であるのに対し、マアチン夫婦は聖人の持つ「聖泉の水」の靈力を聞くまでは盲目の状態にそれ程切迫したものを感じていない。第二段階でも「内供」は鼻が正常になつた時しばらくははればれとした心持ちを感じていたのに対し、マアチン夫婦は光を得たとたん眞実をまのあたりにし、その現実に幻滅を感じなければならなかつた。第三段階で、「鼻」では「内供」が鼻の元に戻つたことに安堵しそれから時を経て状況がどう変化してゆくのかを示さず曖昧な結末になっているのに対し、「The Well of Saints」ではマアチン夫婦は再び光を得ることに動揺しながらもそれを自らの意志で断ち南へ新天地

を求めて旅立つという正の方向性と未来が与えられている。

典拠とされる二作品との相違点を媒介として「内供」の挙動や心理を鼻との関わりから考えると、「内供」の鼻が象徴するものが明らかになってくる。

「内供」の鼻はコワリヨーフのように突発的に生じたものでなく、また「内供」の心理もマアチン夫婦のように偶然に「聖泉の水」が与えられるまで何の手段もこうじないという余裕のある状況ではない。「内供」にとって、奇型の鼻は始終彼を悩ませ正常な鼻になることは非常に切実な問題であった。また、コワリヨーフが鼻が正常に戻ったことで彼のすべてと言って良い（權威）を取り戻せたのに対し、「内供」は正常になった鼻にさえ悩まなければならなかった。

これは、「内供」の苦渋が鼻の外形的な奇型だけに起因するものではなく、彼の内面的な歪みが大きく作用していたことを意味するものである。そして、マアチン夫婦が再び光を得ることを自らの意志で断ち目目のまま自分達の未来を築いてゆこうとしたのに対し、「内供」は奇型に戻った鼻に「晒はれまい」という対他的な視点から満足する。「内供」にとって、笑われないと主観的に思えることで苦悩は癒えるのである。

結局、鼻の奇型による「内供」の苦悩は、外形的な問題よりも「内供」の周囲の挙動を通して自己を計ろうとする虚弱な自己意識に端を発しており、そして、その歪んだ自己意識が改められない限り彼の鼻をめぐる苦悩が癒されない事も自明である。

それでは、このような鼻の存在はどのように「内供」の日常に關わっていたのだろうか。そして、それを描いた芥川の意識はいかなる形で「内供」の心理に反映しているのか。「鼻」のストーリーを追いつながら、「鼻」の重要なテクストとされる『今昔物語』との比較を通して、更に検討を進めてゆく。

五、

芥川が初出の末尾でその典拠としたものに『今昔物語』と『宇治拾遺物語』を挙げている。そして、多く取材されたのは長野富一氏<sup>(1)</sup>によって『今昔物語』（巻二十八「池尾禪珍内供鼻語第二十」）の方であるかと推定されている。

『今昔物語』の冒頭部は「内供」の身辺から描かれ、「鼻」では奇型の鼻の説明から始まる。『今昔物語』の冒頭部は最後の中童子の機知と呼応しており、そのため、まず「内供」がいかなる人物かを強調する必要があった。その「内供」の地位と最後の自己を顧みない愚かな発言との落差が『今昔物語』では軽妙な話の中心となっているためにそのような書きだしになっているのだろう。一方「鼻」はまず奇型の鼻を強調することでそこに注意をひき彼が高徳の僧であることが印象の薄いものになっている。

両「内供」の挙動を比較しても、奇型の鼻はだいぶ精神的な面においてその意味が異なる。『今昔物語』の「内供」は、自己の權威にどっかりとすわり鼻の奇型など気にする様子もない。少なくとも表面的には、無感覚を装っている。一方、「鼻」の「内供」は無駄とも思える治療にすがりつき、何とか精神の安定をはかろうと苦心している。この「内供」の世俗を超越すべき僧であることと人並の鼻になりたいとする希求の不均衡は、さりげなく挿入された「五十歳」という年齢と相乗して「内道場供奉の職」という權威を印象の薄いものにし、奇型の鼻に悩む一人の老人の姿を強く印象づける。鼻の奇型にともなう「内供」の苦悩は、僧という脱俗からも「内道場供奉の職」という權威からも何の救済も得られていない。このような状況から考えても、へ偶像破壊のモチーフへ權威あるものの權威を失墜させるという意図<sup>(2)</sup>は、「鼻」ではそれ程強く感じられない。

また、『今昔物語』では常時くり返される治療を「鼻」では弟子の僧が京から聞いてきた一度の治療に設定し、鼻をめぐって愛慕する「内供」の姿を舞台の中心にすえた。そして、この弟子の僧が「内供」に治療を施す場面には、「内供」の精神の歪みを見ることが

できる。その歪みとは、鼻の外形的な奇型による劣等意識から派生した彼の内部の偏狭さである。

「或年の秋、内供の用を兼ねて、京へ上つた弟子の僧が、知己の医者から長い鼻を短くする方を教つてゐた」というように、「内供」の苦悩は、少なくとも弟子の僧には看破されていた。にもかかわらず、「内供」は弟子の僧が自分を説き伏せてこの方を試みさせるのを待つ。気にしているだけ表面的に無感覚を装うことで、「自尊心」と「劣等意識」の均衡を保とうとするのである。そうして、やつと「不承不承」に治療を受ける「内供」の姿には、自身を受身にすることで精神の安定をはかり自己の立場を確保しようとする自尊心の強固さ、屈折した自己防禦の姿勢を見ることが出来る。

更に、弟子の僧が治療のために鼻を踏む場面には、「内供」と周囲各々のお互いへの心理の暗示が潜んでいる。

はげ頭は僧であることの証であり、また世俗を離れた権威を象徴するものである。そして、それが今見下されているのだ。これは、明らかに彼の高德の僧としての尊嚴の喪失を意味するものである。先に「内供」が高徳の僧であることは印象の薄いものになっていると述べたが、高德の僧であるという「権威」は何ら鼻の奇型によって生じる彼の苦渋を癒すことができない。逆にその「権威」は、弟子の僧によって見下されているのだ。そして、「内供」が弟子の僧の足に見たあかぎれも、「内供」が周囲の者達に見いだしている人間の亀裂（これは、あくまでも常に被害者意識に包まれている「内供」からの偏狭な対人間観から生じたものである）を暗示するものと考えられる。好意を示す人間に対しても屈折した見方しかできない、彼の目に映った周囲の人間全般に対する評価であろう。このように弟子の僧が見下す「内供」のはげ頭と「内供」が弟子の僧の足に見つけたあかぎれは、たんに鼻を踏む弟子と踏まれる「内供」の位置を示す役割のみを負っているのではない。このやりとりにおけるはげ頭とあかぎれという語には、芥川による意味付けがあったと考えられる。

弟子の僧が「気の毒さうな顔をして」見下すはげ頭と親切な弟子

の治療に「不足」「不愉快」「不服」さ覚える「内供」の見るあかぎれが意味するものは、いわば、周囲の「内供」に対する対「内供」観であり、「内供」の周囲に対する対人間観である。これは、治療の前の二人の心理に如実にあらわれている。鼻など気にかけない風でわざとその方をすぐにやろうとしない「内供」の「策略」に「反感」よりは、内供のさう云ふ策略をとる心もちの方がより強くこの弟子の僧の同情を動かした「ように」「内供」の挙動は憐憫の情から擁護されているのである。そして、「内供」は、その弟子の善意にも「予期通り、口を極めて、この法を試みる事を勧めました」と屈折した受容をなすのであった。この状況は、先の見下されるはげ頭とあかぎれの暗示を充分に裏付けるものである。

## 六、

「内供」は治療のかいあって正常に近い鼻になる。しかし、しばらくすると周囲の態度のおかしいのに気づく。その「内供」が周囲に感じた今迄と違ふ笑いの質は、作中「傍観者のエゴイズム」という表現で説明される。この唐突すぎる解釈は、一応は納得して聞けるもののそれだけでは解決できないものがこの場面には潜んでいる。芥川も認めているように正常になつても尚笑われる展開は、たんに「傍観者のエゴイズム」によつてのみ説明できるものではない。つまり、この笑いの原因は「内供」の外形としての鼻の変化にとどまる問題ではないということだ。笑う周囲だけでなく笑われると感じる「内供」の内部にも多くその原因があるのではないかということである。「内供」の内へ劣等意識が強くなればなる程それを覆い隠そうとする「自尊心」が強くなってゆく。揺れ動くその不安定さがナイーブな「内供」の心情を苛むのだ。「内供」は、常に対他的に自分で自分を認められずに生きている。鼻の大きさは変わつても、彼の精神は何一つ変わることなく周囲の相対的な視野の中で翻

弄されるのである（少なくとも「内供」は、そのような思いを払拭できない）。「傍観者のエゴイズム」という観点は、「内供」の鼻めぐつての長短に羨望するストリーアの進行上非常に大きな役割を占めている。しかし、その根底には「内供」の精神の問題が潜んでいる。どんな些細なことでも、彼の精神の安定を揺らすことができ、それ程「内供」の劣等意識、被害者意識は内部深く根づいていたのである。

そして、「内供」の奇型の鼻による弊害は、「一つは實際的に、鼻の長いのが不便だった」とことと、それによって被る「自尊心の毀損」とされている。つまり、奇型ゆえにその鼻を他人に委ねないと食事ができない、そのことで傷つけられる（自尊心）のために精神の安定を揺らされるのが不快であるというのである。それは、他人の手に委ねられる鼻が實際に不便である以上に、鼻が自己意識の象徴として存在したことが密接に関係している。元来（自尊心）の強い「内供」にとって他人の手を煩わすこと、つまり自己の肉体を自身で統制できないことは何よりも彼の（自尊心）を痛めつけるものだったのである。

これらの感情は、鼻が奇型であるという特殊性から生じた劣等意識に由来するものである。ゆえに、「内供」はそういう意識を払拭するために人間としての外形の一般性を得たいと希求するのだ。「内供」が効果のない積極的・消極的治療に苦心したのも、その一般的な外形を得るためのものであったのである。「内供」は、少なくともそうなることで彼の意識を悩ますすべてのものが解決できると思つたのだ。作中の食事の際の弊害と連関させて考えるならば、もう誰にも自身の柔らかな心情の象徴である鼻を触れられることがなくなることで、自己喪失の状況も「自尊心の毀損」もなくなると思つたのである。しかし、その思いはいともたやすく打ち砕かれる。それも「内供」が自尊心の強いゆえに奇型の鼻に悩まなければならなかったのと同様に、その被害者意識や自己意識の過剰ゆえに正常に戻つた鼻にも悩まなければならなかったという状況を自ら創りだしたためである。

鼻が短くなって、「内供」が心静かにいられたのは僅かであった。「内供」は、正常に戻つた鼻にさえ周囲のものたちに以前にもまして「つけつけ」と笑われていたような気がする。ここには、常に自身の被害者意識におどらされ自己の本来を見失っている人間の姿がある。鼻の奇型は精神の歪みを生じさせ、その歪みは「内供」自身が自分を客観的に観察できないまでに昂じている。「内供」は、自身を自己の主体として確立できないでいるのだ。

「内供」の鼻は、再び元の奇型の鼻に戻る。そして、「内供」が長い鼻を明け方の秋風にぶらつかせながら「かうなれば、もう誰も唾ふものはないの」にちがひない」と心の内でつぶやく場面をもって「鼻」は結ばれる。しかし、はたして最後の文章が示すように「内供」は「はればれとした心もち」のまま、誰にも笑われることなくこれからの日々を送ってゆけただろうか。

この文章に関して、三好行雄氏は「明らかに錯覚である。今日からはまた、長くなつた鼻を内供は笑われなければならぬはずである」という見解<sup>(20)</sup>を示した。それに対し、平岡敏夫氏は「たとえ唾われようと、長い鼻をあげ方の秋風にぶらつかせながら生きて行くばかりである」と説いて、三好氏に反論している。

「内供」が「かうなれば、もう誰も唾ふものはないの」にちがひない」とつぶやいたのは、この時ばかりではない。「内供」は奇型の鼻が治療のかいあって正常に戻つた時にも同じ言葉を心の内でつぶやいている。正常になつた時、「内供」の安堵は錯覚に終わった。再び奇型に戻つた時、前の状況を考えれば「内供」の安堵も錯覚となるかもしれない。しかし、そこに「内供」の（これから）を見る必要があるだろうか。それよりも、むしろ、そのような曖昧な形では「内供」のこれからを収束できなかった芥川の創作意識の方に注意をむけるべきであろう。

先に「羅生門」の下人の姿を、ある意味では芥川のありたい姿ではなかったかと述べた。それは、すべてを自己の論理で決定し迷うことなく自己の「人生」を貫く下人の姿である。それに対して「内供」は何一つ自分の内で決定できない。常に奇型の鼻をもてあまし周囲の相対的な視野の中で右顧左眄している人間である。しかし、その「内供」が「愛すべき」対象であったことは、芥川の内「内供」の苦渋を共有できる同質の虚弱な部分があったことを示しているよう。「明が欠けてゐた」「内供」と明晰な芥川を重ねることはできない。しかし、「内供」が被害者意識や自己意識の過剰ゆえに自己の本然を見失っていたのと同様、冒頭でふれたように芥川も複雑な家族の愛情に自己の本然を就縛され、その枷を解くことができなかったのである。

肉体に限らず精神的なもので、そして、それがどんな些細なことでも「劣等意識」をもてば苦惱は同様であろう。後に、芥川が「芋粥」(『新小説』大5・9)、「猿」(『新思潮』大5・9)、「毛利先生」(『新潮』大8・1)と同系列の作品を執筆し、状況は異なるものの彼らの「これから」を同質の曖昧な結末でしか作品を収束できなかったゆえんもここらあたりにあるのではないか。これは、周囲の心ない対応に翻弄され確固たる自己意識を持たない脆弱な生に通じる血脈を芥川自身も保持していたことを示そう。迫害は別として、周囲に対して奔放な自我をもてなかった状況は、決して芥川の日常と無縁ではなかったはずである。

芥川は「内供」のこれからを充分に理解しながら、あえてそれを描かなかつた。それは、芥川が弟子の僧などの誰よりも「内供」の真実の苦惱を理解していたからである。その真実の苦惱とは、「自尊心」と「劣等意識」との不均衡によって生じるVanityの問題である。この問題には、芥川も悩んでいた。

鼻の奇型という特殊性によって負わねばならなかった「劣等意識」を覆い隠そうとするVanityが働く、そして、その「劣等意識」を払拭できない限り、それを包もうとするVanityは「内供」の内部で屈折した周囲や自己に対する見方を形成し、常に周囲の挙動を観察し、

自己に対する反応を通して自己の存在を確かめようとする。芥川は、「内供」のそのような不安定な精神を充分に理解していた。それゆえに、たとえ外形の奇型が治っても「内供」の精神の歪みが癒えない限り、「内供」のこれからのこれまでと同様であることを芥川は了解していたのだ。だからこそ、芥川はそこに何の注釈も加えることなく作品を結んだのである。

結局、芥川が「劣等意識」と「自尊心」との不均衡、そしてそこから生じるVanityに悩む「内供」の内「内供」の内に自らと同じ血脈を感じ、また、そのような「内供」の所業に「愛すべき」という形容を吐露しなければならなかったところが「内供」のこれからの曖昧に描くに至ったゆえんである。そして、結果的には「内供」を鼻の奇型など何ら意に介する様子がない下人の人物に造型できなかったという意味で、「鼻」は「愉快」とも思われぬ小説に終わってしまったのだ。

#### 八、

我々は正三年から正四年初頃の失恋事件を一つの契機として大正五年に至るまで、書簡で自己を核として様々な問題に對峙し悩む芥川の自己確立の過程を読みとることが出来る。芸術に対する意識が次第に能動的具体的になってゆく状況の中で、芥川は失恋を体験する。これを「柔かな引き金」として、芸術に対する一層明確な姿勢が確立されてゆく一方で、家族に対する不信や就縛を明確に感じるようになる。いわば、この状況は後年出生や複雑な家庭の内面を描き、それを自己の宿命の根源として捉える心理の端緒を垣間見たということになる。また、それは家族という狭い世界での束縛という問題にとどまらず、エゴイズムやヴァニティという人間それ自体のかかえ込む問題として芥川の内「内供」に胚胎してゆく。しかし、この問題は、未だ深刻な虚無や厭世へと派生してゆくのではなく、



その認識の始まりという段階にとどまっていたと考えられる。

そのように様々な問題をかかえ込む人間の存在を自己の問題として捉え、芥川の内には様々な制約からの解放というモチーフが生じてくる。そして、芥川がこの解放のモチーフの作品化によって束縛される「現状」から懸け離れることに「愉快」さを得ようとしたのが「羅生門」と「鼻」であった。

「羅生門」の下人は芥川の解放のモチーフを体現し、道徳的な躊躇や感傷的な感情を払拭し意志を持って自己の生の方向を定め得た。しかし、「鼻」の内供は自尊心の強さにとまなう鼻に対する劣等感により安定した自己意識を持たず、周囲の挙動というよりも猜疑心から生じる自己喪失の状況を常にもてあましている。つまり、「鼻」は、意志による自己決定もなしえず、対他的に自己を対応させる解放とは逆の束縛される「内供」を描くに終わったのである。芥川が「内供」の造型に志向した「愉快」さを感じようとするならば、「今昔物語」の内供のように鼻など気にする様子もない人物に造型するか、「内供」の悪行を侮蔑する状況を創るべきであったのだ。下人という「仮面」は、周囲の束縛を解くこともできず自己犠牲的に振る舞ってしまう芥川の素顔を隠し、芥川の志向した解放という「愉快」さを体現した。いわば、観念の内での求めた様々な束縛からの解放という状況が形象化されたのである。しかし、「内供」という「仮面」は、時折自尊心や虚栄心という芥川の素顔の問題をのぞかせ、解放という「愉快」さを体現してくれるには至らなかった。つまり、観念の内では様々な枷を超越するという芥川の志向を達成し得ず、結局、自己の性情の一断面を確認することになったのだ。そして、結果的に「鼻」は、芥川の志向したものと逆の「現状」に近い状況を描くに終わったために「愉快」とも思われぬ小説となってしまったのである。

一注一

(1) 漱石を第一の読者にして雑誌を出す、このアイデアは名案だ  
「第四次新思潮」(松岡謙「新思潮」復刻版別冊、昭42・10)

(2) 芥川なども「羅生門」を「帝国文学」に発表していたし「帝国文学」ならいつでも書けたのだが、やはり自分達の雑誌でないと張り切れないと口癖に言っていた。(注1に同じ)

(3) ある女を昔から知っていた。その女がある男と約婚した。僕はその時になつてはじめて僕がその女を愛してゐる事を知つた。略一僕は求婚しやうと思つた。一中略一家のものに話をもち出した。そして烈しい反対を受けた。伯母が夜通し泣いた。僕も夜通し泣いた。あくる朝むすかしい顔をしながらい僕が思い切ると云つた。それから不愉快な気まずい日が何日もつづるた。(大4・2・28 恒藤恭苑書簡)。これを始めてして、大4・3・9 恒藤恭苑書簡；大4・3・12 恒藤恭苑書簡；大4・4・23 山本喜誉司宛書簡、等々の書簡に失恋の痛手を綴っている。

(4) 自分は「このもの」の信仰あり、こは「芸術」の信仰なり  
この信仰の下に感ずる法悦が他の信仰の与ふる法悦に劣れりとも思はれず(大3・1・21 恒藤恭苑書簡)。この書簡から注5の海老井英次氏の考察の論拠となっている芸術に対する確固たる姿勢を示す大正三年秋の書簡に至るまで、具体的に芸術という言葉はでてこないが彼の精神の葛藤や自己の内部を諦観する芥川の真摯な自己確立の過程を見ることができ

(5) 海老井氏は、芥川の佐佐木茂素宛書簡(大8・7・31)の「僕一時(二十三歳前後)精神的に革命を受け始めてゲエテの如きトルストイの如き巨匠を正眼に見得たりと信ぜし時あり」という一節に注目し、芥川の作家としての成長の実体を「

私としては、芥川の自我への覚醒が核心であると捉え、それ  
に關与した事柄として、大正三年秋における芸術観上の「精  
神的革命」と、周知の「初恋の破綻」とを前者に重きを置く  
形で考えている。「『老年』から『羅生門』へ」大正三年秋  
の「精神的な革命」による「飛翔」(『国文学』昭58・3)  
と芥川のこの期の精神の核を考察している。

(6) 私は二十年をあげて軽薄な生活に没頭してゐた事を恥かしく  
思ひます さうしてひとり芸術に對してのみならず生活に對  
しても不真面目な態度をとつてゐた自分を大馬鹿だと思ひま  
す はじめて私には芸術と云ふ事が如何に偉大な如何に厳肅  
な事業だかわかりました (大4・4・23 山本喜登司宛書簡  
)。この書簡を始めとして、この後にも自己を「眞摯に見つめ  
、思索する芥川の姿を書簡に見ることができる。

(7) 海老井英次氏は、「私の踏んで来た道」『羅生門』の後に「  
『時事新報』大6・5・6」の「一度『帝国文学』の新年  
号へ原稿を持ちこんで、返された覚へがあるが、一後略」と  
という一節に注目し、「同誌の大正四年新年号用に持ち込ん  
で結局採用されなかったといつてゐるその作品が、実は「羅  
生門」の初稿だったことが、ここに十分に示唆されているの  
ではあるまいか。」(注5に同じ)と失恋事件の前すでに  
「羅生門」の初稿はできていたとして、「羅生門」と失恋事  
件との関わりの希薄さを説いている。

(8) 「芥川龍之介論」：小説家の誕生(昭51・9 筑摩書房)  
(9) 失恋の痛手を綴った書簡から時を置かず、「文ちやんは勿論  
僕の所へ来る人ではないでせう しかしその理由は君の云ふ  
正反対です 僕の方が無資格です」「Yの事は一日一日忘れ  
てゆきます」(大4・5・2 山本喜登司宛書簡)や「殆、無

意味的に、僕の愛を文ちやんに向けるものを要求(特に君か  
らと云ふ訳でなくとも)してゐた」(大4・11・21 山本喜登  
司宛書簡)を始めとして、「鼻」執筆中のメモと思われるも  
のに「：一月九日。Fの事を考える。Egoism of the  
unhappy。：一月二十日。『鼻』を書き上げる。久米と成瀬  
と夜おそく Cafe Lionではなす。かへりにC(新原家の女中  
であつた吉村千代一注下野)の事を考へる。かはいさうにな  
る。：一月二二日。山本への手紙を出す(塚本文への興味や  
愛を述べた書簡一注下野)。Fを思ふ。：一月二四日。小説  
をかく。Cを思ふ。さびしくなる。：一月二六日。間歇的に  
くるYのMemoryに圧倒された。」などを見ると、芥川の失恋  
の痛手をどこまで計算して作品と関わらせてゆか疑問の残  
るところである。

(10) 「批評と研究 芥川龍之介」：「羅生門・芋粥」(『文芸批  
評の会編』昭47・11 芳賀書店)

(11) 注3の恒藤恭宛書簡(大4・2・28)を始めとして、「如何  
に血族の関係が稀薄なものであるか。如何にイゴイズムを離  
れた愛が存在しないか。如何に相互の理解が不可能であるか  
」(大4・4・23 山本喜登司宛書簡)等にも家族への不信を  
述べている。

(12) 今まで僕は彼らの愛の中に生きて、これからは彼らを僕の愛  
の中に生かしてやる(手帳一)：Family-system is hell.  
Every member of a family sacrifices oneself more  
or less for the family. What a disgust/(手帳五)  
このように家族に對して束縛感を感じているメモが残ってい  
る。

(13) 共に日本近代文学館の『芥川龍之介文庫』に収蔵されている

ものである。「The Nose」は「羊羹」と「The Mantol」との密接な関係を考慮すれば、この時期に芥川が読んだことはまちがいあるまい。また、「The Well of Saints」も注17の芥川のアイルランド文学への興味を考慮すれば、やはり芥川の目に触れたと考えられる。しかし、両作品とも「鼻」との具体的な描写や場面の類似が乏しいためどこまで典拠として扱うか難しいところである。

- (14) After two minutes the nose actually came out again. It wore a goldenbroided uniform with a stiff, high collar, trousers of chamois leather and sword hung at its side. The hat, adorned with a plume, showed that it held the rank of a state-councillor. (The Mantle and other stouries))

- (15) To increase his misfortune, not a single droshky was to be seen in the street, and so he was obliged to proceed on foot. He wrapped himself in his cloak, and held his handkerchief himself to his face as though his nose bled. (The Mantle and other stouries))

- (16) 「鼻」私考—シングの戯曲「聖者の泉」を起点として—(昭和女子大「学苑」517 昭58・1)

- (17) 実際に「ケルトの薄明」より」(『新思潮』大3・4)、「春の心臓」(『新思潮』大3・6)など、イエーツの翻訳を柳川龍之介の筆名で発表しており、また、恒藤恭宛書簡(大3・3・2; 大3・3・19)を始めとしてこの期の書簡にはアイルランド文学に関わる事項が多く見られる。

- (18) 「古典と近代作家—芥川龍之介—」(昭42・4 有朋堂)

- (19) 「鼻」の曲折が natural でないと云ふ非難は当たっている、それは綿枝(註)も指摘してくれた。重々尤に思っている。(大5・3・24 恒藤恭宛書簡)

- (20) 注(8)に同じ

- (21) 「芥川龍之介—抒情の美学—」(昭51・9 大修館書店)

- (22) 僕を苦しませるヴァニチーと性欲とイゴイズムと僕の千ヤスチファイし得べきものに向上させたい(大4・3・12 恒藤恭宛書簡)：ある単純な感情の中でさくVanityは無限にある(註)まして複雑な感情をや(大4・12・3 恒藤恭宛書簡)。これらの書簡からも芥川が「ヴァニチー」の問題を切実なものとして捉えていたことが理解されよう。

\* 芥川作品や書簡の引用はすべて『芥川龍之介全集』全十二巻(昭52・7)53・7 岩波書店)に拠り、また、旧字体は新字体に改めた。

—九州大学文学部研究生—